

■東京ローズ (アイバ・戸栗・ダキノ)太平洋戦争中の連合軍向け宣伝放送のアナウンサーで、唯一特定されて悲劇、のち大赦。

とうきょうろおず (Iva Toguri D' Aquino)

民本主義・1916= アメリカの独立記念日に、カリフォルニア州ロサンゼルスで、輸入雑貨店{戸栗商店(J. Toguri Mercantile Co.)}を営む山梨県出身の父と、東京府出身の母ふみの娘、_日系アメリカ人2世に生まれ、両親の教育方針で、アメリカ風のしつけと教育を受け、日本語の正式な教育を受ける機会とは与えられずに育ち、

原敬首相暗殺1921= 5歳:

護憲三派決勝1924= 8歳: 排日移民法に至る日系人への差別が強まるなか、治安維持法・1925= 9歳:

満州事変・1931=15歳: 優秀な成績で白人地区の市立ハイスクールに入学、熱心なキリスト教徒だった母のもと、持って生まれた明るい性格で、全く差別を感じないで育つも、

五一五事件・1932=16歳: 兄、妹ともに、それまで日本との二重国籍が差別の原因であると日本国籍を除籍、

帝人疑獄事件1934=18歳: 卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校に入学して動物学を学び、

日中戦争始・1937=21歳:

大政翼賛会・1940=24歳: 病気で2年ほどの休学もあったものの、卒業して同大学院動物学科の博士課程に進んでまもなく、

日米開戦・1941=25歳: 突然、_病床にあった母の妹シズの見舞いに、やはり病床にあった母に代わって来日することになるが、日米関係の悪化で、旅券が得られず身分証明書のみで来日、日本人の生活様式や習慣には馴染めず、とりわけ、アメリカには無かった銭湯での“混浴”、アメリカの基準から見ると不衛生な便所に悩み、何度も両親へ‘アメリカに帰りたい’という手紙を送るが、旅券が無いため戻れぬうちに、日米開戦で不可能となる。その後2度運航された、日米間の戦時交換船によるアメリカ渡航を申請するも、米国では日系人の強制収容が始まっていて帰国は叶わず、母親は、アメリカで日系人収容所へ行く途中に病死してしまう不幸のなか、何度も日本の特高警察から、日本への帰化の圧力をかけられたも拒否し続け、日本での生活のため同盟通信社の愛宕山受信所で外国の短波放送傍受とタイピングの仕事に就く。

..... 1942=26歳: 軍当局の発案で、連合国軍捕虜のラジオ放送の専門家を使って、{ラジオ・トーキョー放送}で、連合国軍向けプロパガンダ放送を行うこととし、元オーストラリアABCのアナウンサーでオーストラリア兵捕虜のチャールズ・カズンズ少佐、元アメリカのフリーランスアナウンサーでアメリカ兵捕虜ウォレス・インズ大尉らを参加させた。カズンズ少佐は当初拒んだが、最終的に承諾、そして始まったのが{ゼロ・アワー}で、音楽と語りを中心に、アメリカ人捕虜が連合国軍兵士に向けて呼びかけるというスタイルを基本としていたが、_日本放送協会海外局米州部業務班でタイピストとして勤務する傍ら、アメリカの短波放送が聞けるということから、日本軍の参謀本部の恒石重嗣少佐の下で、{ラジオ・トーキョー放送}の対外宣伝ラジオ番組のスタッフとなる。日本語原稿を英語の原稿に訳す作業を業務としていたが、

創価学会検挙1943=27歳: *連合国軍兵士へのアピール性が期待され、{ゼロ・アワー}の原稿を読むことになる。女性アナウンサーの一人として、“孤児のアン”と名乗って曲の紹介などをするうち、番組を管理していたオーストラリア兵捕虜カズンズから、密かに日本軍に抵抗していたことを打ち明けられ、DJを引き受けると、アメリカ軍兵士たちの間で評判になり、“東京ローズ”の愛称を付けられ、アメリカ本国でも注目され、

年金+総武装 1944=28歳: 同僚によれば、おとなしく笑顔を絶やさなかったと言う。_ニューヨーク・タイムズが記事で取り上げ、
敗戦..... 1945=29歳: _{ゼロ・アワー}は終戦前日まで放送された。終戦間際、長年同棲関係にあった、日系の中立国であったポルトガル人の同盟通信社員のフィリップ・ダキノと結婚し、日本敗戦と同時に東京を脱出。連合国の占領軍が日本本土に進駐を開始すると、従軍記者達は、GHQの制止を振り切って“東京ローズ”探し回り、そのうちの花形記者クラーク・リーに“発見”され、録画カメラの前で自分が“東京ローズ”だと言明、自ら公言した唯一の“東京ローズ”として、日米マスコミの取材合戦は過熱、映画まで撮られるが、米本土で“反逆者”という記事が出て反響、GHQにより反逆罪容疑で巣鴨プリズンに収監され、FBIの取り調べを受けた後、反逆罪で、アメリカ本国に強制送還され、最も反日感情が強いカリフォルニア州の検事から“対日協力者”として、最も重罪の国家反逆罪で起訴される。

新憲法公布・1946=30歳: アメリカで、前年制作された映画「Tokyo Rose」が公開される。

三大事件..... 1949=33歳: 父と8年ぶりに再会するも、*カリフォルニア州サンフランシスコ連邦裁判所で裁判が開始され、陪審員は全員白人の、アメリカ建国史上最大の裁判となり、証人として日本から来た夫ダキノと再会するも、その後会うことはなく、兵士らが証言した“東京ローズ”の声質や放送内容が一致しないのが実情で、弁護側は、検察側双方の証人の証言から、マスコミは、無罪になると予想したが、女性史上初の国家反逆罪として、有罪判決が下され、禁錮10年、アメリカ市民権剥奪などを言い渡され、ウェスト・バージニアの女囚刑務所に収容。弁護士たちの控訴、再審申し立て、いずれも却下され、黙々と服役、

独立回復..... 1951=35歳:

メデー事件・1952=36歳:

55年体制始・1955=39歳: 裁判の矛盾が明かになることを恐れたのか、_6年2ヶ月の服役後、模範囚として仮釈放されるも、

なべ底不況・1957=41歳: 居住地の制限も加えられるなど苦しい監視期間も終わると、シカゴの父の店{戸栗商店}で働き始めたことが、後述のドウス昌代の書で分かる。日本にいる夫ダキノとは、事実上の離婚状態になっていた。_市民権は剥奪されたままであり、二度にわたり提出した嘆願書も黙殺されたが、

安保闘争..... 1960=44歳:

タイタイ病始・1961=45歳:

東京リビック 1964=48歳: 連合軍司令官だったダグラス・マッカーサーも、この年出版の回顧録(回想記)で“東京ローズ”に言及。

全共闘ビーク 1969=53歳: 五島勉「東京ローズ残酷物語 ある女スパイと太平洋戦争」が出版される。長い間の沈黙を破って、{エスカイヤ}誌のインタビューに応じるも、真相はいぜん謎に包まれたままであったが、

大阪万博..... 1970=54歳:

_日系アメリカ人市民同盟や在郷軍人たちによる支援活動も活発になるとともに、有罪判決は疑問視され、裁判が、終始人種的偏見に満ちたものであったとの認識も広まり、
石油ショック 1973=57歳: 五島勉の前記の書を改題して出版された「東京ローズの戦慄」の年譜の最後は、'消息空白。マスコミの表面からもまったく姿を消し、現地の日本人社会の噂にもおぼろげ。'となっている。

田中角栄逮捕1976=60歳: '裁判の証人だった元上司2人が'証言は事実でなく、FBIに偽証を強要され、リハーサルもさせられた'などと告白した記事を、アメリカ人日本特派員記者がスクープ報道するなどした結果、日本の全国紙でも報道された、大統領に復権を求める三度目の嘆願書がようやく実って、

JALハイジャック 1977=61歳: ドウス昌代「東京ローズ 反逆者の汚名に泣いた30年」が出版されるが、カリフォルニア州のドウスの家に来た時の写真が掲載されている。*フォード大統領による特赦によりアメリカの国籍を回復した。

成田衝突..... 1978=62歳: 上坂冬子「特赦」出版。

革新大敗北・1979=63歳:

その後、シカゴに転居、父が創業した輸入雑貨店{戸栗商店(J. Toguri Mercantile Co.)}で働き続け、

中曽根内閣・1982=66歳:

リクルート事件・1988=72歳:

55年体制終・1993=77歳:

村山事件 1995=79歳: 「特赦」を改題した文庫本「東京ローズ 戦時謀略放送の花」が出版され、

金融破綻..... 1997=81歳:

小泉北朝鮮 2002=86歳: 井上ひさしが戯曲「東京セブンローズ(上・下)」を出版するなど、日本でも関心を持ち続けられるなか、
..... 2006=90歳: _困難な時も米国籍を捨てようとしなかった“愛国的市民”として退役軍人会に表彰され、感激の涙を流し、まもなく、脳卒中のため、没した。

Wikipedia「東京ローズ」、五島勉「東京ローズの戦慄」、ドウス昌代「東京ローズ 反逆者の汚名に泣いた30年」で若干補足、